

二〇一九年度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

(三回)

国語

注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は **一** から **三**、2 ページから 19 ページまであります。
合図があったら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

□ 次の【Ⅰ】～【Ⅲ】の文章は立川談志の「好きな仕事も簡単ではない」の文章の一部である。この文章を読んで、後の一から八の各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

【Ⅰ】

私は本当に子供の時分からしゃべることが好きで、落語をやりたかった。寄席の世界にあこがれてましたから、高校を途中でやめて故郷の①門をたたいた。でも好きというだけでは食べていけないと、よく分かっていましたね。とにかく一人前になって食べられる力をつけなくてはならない。落語を修業し、礼儀も文化も必死で学ぶわけです。嫌なこともやらされるのが人生の修業。そうやって好きな仕事で食べていく資格を手に入れる努力をしてきたんです。

ところが今は、若者に向かって、個性を生かして好きな仕事をしなさい、などと言う。親も、周囲の大人もマスコミも口をそろえて、自由に選べば君の仕事になるなどとおおる。大人も悪いけれど、それは違っていやしくないか。

たとえば学校の国語の成績がよくって文章を書くのが好きだったからといって、新聞社で連載小説書かせてくれたりするわけではない。こういう極端な例を出せば、みんな当たり前だと言うけれど、実は程度こそ違え自分のレベルや力量を知らない人間が多すぎるんじゃないか。財務省に行く人もいれば、パチンコ店に勤める、料理人になる、もちろん何の職業でもいいのだけれど、そうなれる資格、レベルに自分を持っていく道筋がどうもあやふや。

好きなことをやり、それで食べるようになりたい。だからそこに向かって懸命になるはずが、現代はアルバイトで食べてしまう。それは楽なごまかしになっていくのではないだろうか。

やりたいことをやりながら自分の生き方を探している、と世界各地を旅している若い人がいます。会社勤めで朝から晩まで自由にならないサラリーマンを気の毒がりながら外国旅行に出かけて行く。お金がなくなると半年くらいは嫌々働いて旅行のために我慢する。いつ

までやり続けられるのか知らないけれど、②これはなかなか苦しいですよ。そのうち嫌々働く時間に耐えられなくなってくると思う。よほど自分で自分をコントロールする力がないと、また逃げ出したくなるでしょうね。

昔のことを伝えるのは大事だと思うから言いますが、世間と何の関係もなく好き勝手に生きる人間は、やっぱりはじき出されていきます。落語に「こんにやく問答」というのがあります。遊び人が地方のこんにやく屋に行くと、その親父が「遊んでちゃいけねえ。何か仕事をしたらどうだい」って諭す。「仕事ねえ、やってもいいけど村中見回って歩いておつなりして、酒喰らって女にもてて……」「そんな仕事あるかよ、ばかやろう」って。

仕事をするっていうのは社会とつながること。好きな仕事であってもそうなれる努力をしなくてはなりません。

【II】

厳しいことをまず身内から言ってみる。今、落語をやりたいと言って門をたたく人間は増えていきますよ。まあ志願してくる人を拒まない。これはどこでもそうだと思います。それはいいんだ。身の置き所を決めるわけだから。

落語家というのは着物という③重宝な、ちよつと人目を引く衣装があるから、外からはそれらしく見えてしまう。落語をひとつかふたつしか話せなくても、あとは大衆受けする趣味のひとつもネタにすればずっとテレビに出られたりする。そういう連中が本当に大勢いますよ。需要があるから仕方がないですけどね。

ところがそういう落語家が人をうならせる話を高座でできるかって言うと、落語にも何もなっていない。学生が、好きというだけで落研に入って喜んでいるのとあんまり変わらないと思いますね。本当に落語を心底やりたいのかと問い詰めたら、さて居直れるだろうか。正直言つて、芸になっていない落語を聞かされる客は本当にいい迷惑ですよ。

気づいている落語家もいる。浮かれて落語家のような気になっている奴もいる。働き者の日本人が仕事中毒などと世界から嫌われても地道に残してきた経済的な余裕があるから、それで食べていくことができている。今はまだそういう余力がある時代ですから、誰でもが

半端なままで食べていけるだけです。

落語を選んだ。さあそこから先が問題なんです。テレビで気の利いた小咄こぼなしやってギャラもいただいて、その④恵まれた日々かけの陰で、本質にどう取り組むかってことがね。

古典落語を次々と覚えてある程度語れるという奴は、これまた大勢いる。落語は実によくできている話だからそれ自体に魅力みりよくがあるが、では淀みなく語ればお客さんが喜んでくれるかというと、またそれが難しい。じゃあいったい自分はどうすればお客さんの心をつかめるのか。自分では落語が好きだと言ってみたって面白くないものは、面白くない。限界を知ることになる。

あとは⑤挑戦ちょうせんするしかないんだが、壁かべに当たると俺おれは努力してるのに、などと言い出す。一生懸命いっしょうけんめいやってるのにな。だから何だかってことですよ。よくやってるじゃないかと褒めてもらいたいらしいが甘えちゃいけない。乗り越えてるんだという姿が第三者に見えてしまう奴はほとんどダメですね。誰もそんな様子は見たくないんだから、野暮やぼですよ。

長嶋選手*アナガシマが現役時代に練習でバットを振り続けたのだから、努力ではなく、それをしないとられない自分がいるから、無意識に実行していたわけ。私の落語だって自分のアイデアを次々に試し、笑いのセンスをぶつけている。努力してるんじゃないから、やらないの。ただ一人で突き進んでしまうんです。

【III】

昨今の情報の流れ込み方こといったら本当に大変なもので、どこからが自分の考えで、どこからがただの知識なのか、現代人はもう判断がつきにくくなってると思う。

かつて鎖国せこくをしていた頃はせいぜいオランダやポルトガルの文明が入ってくるだけだった。もちろん無知なことが良いと言っているのではなくて、庶民しよみんが一人ひとり自分の幸せの基準を自分で考えて決めていた時代があった。幸せの実感が、頭でっかちにならずに暮らしの中で見える生活だったろうと思うのですね。

でも現代は、情報へ文明へとみんながならってしまおう。しかもスピードがついている。そうなると腰の据わった判断は難しいものになってくる。私だって人のことは言えない。新聞やテレビ、山のような本から仕入れた知識をひけらかして人をやり込めようとしているかもしれない。でもうちのカミさんなどはまったく動じませんね。「なにを理屈こねてんの。私はそんなこと必要ないわよ」とキツパリとおっしゃる。⑥その姿は信用できるんですよ。

ものごとの判断ができるかどうかは、学問の量とは関係がないし、ましてや耳に蓄えた知識によりかかって自分のことを決められるわけがない。結局育ってきた環境や親の言うこと、自分の能力でかなうこと、執着してしまふことなどを総動員してウンウンと考えるだけ。その中で執着、執念というのが「好きの虫」の住んでるところです。

好きなことを見つけて仕事にしましょう、という今の風潮はどこか据わりの悪い。でもひとつの仕事に就いてみてそれが面白くなってくるなら分かる。あなたにとつていい仕事なんだと思う。

例えばJ Rの時刻ダイヤを作るといふ、気の遠くなるような細かく緻密な仕事がありますね。いくら頼まれても脅かされても私には手に負えない。けれどあんなに大変な仕事が苦にならない、面白いという人々がいるんです。すごいことじゃないですか。

また、私の知人に映画の演出をやりたいという人間がいて、いい大学出ていたし、すんなり映画会社に採用された。ところが彼は食堂の仕事に回されたんですね。さあどうするかと思っていたら、ずっと食堂の仕事に精を出して今日に至っている。ちゃんとそこに面白みを見つけたんです。偉いとも思うし、人間はいやなことばかりの中では生きていけないから、彼なりに「好きの虫」を育てることができたのだと思いますね。

好きなことは簡単に目に見えるわけではないし、勉強を人並み以上にやったから手にできるといふものでもない。いやいや跡を継いだ親父の仕事で、気がついたら工夫を重ねたりしてかけがえのない仕事になっていたということもある。入り口はいろいろでも、⑦仕事にはだいたいご味が待ってるんです。

〔注〕 *1 寄席よせ||落語などの技芸を観客に見せる場所。

*2 故小こさん師匠ししょう||五代目柳家小やなぎやこさん。作者の師匠ししょう。

*3 おつい||粋いきなこと。普通ふつうとは違ちがう面白味のある様子。

*4 高座こうざ||芸人が芸をするための舞台ぶたい。

*5 落研おちけん||落語研究会。大学サークルの一つ。

*6 ギャラほうしゅう||報酬のこと。

*7 長嶋選手ながしま||一九六〇〜七〇年代に活躍かつやくした野球選手。読売巨人軍の現終身名誉監督めいよかんとくの長嶋茂雄ながしましげおのこと。

問一 | 線① 「門をたたいた」とありますが、本文中の「門をたたく」の意味と同じ用いられ方をしているものとして最も適当なものを

次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア プロの演奏家になりたくて、有名な指揮者しきしやの門をたたいた。

イ 家に誰だれかいるかを確認したくて、門をたたいた。

ウ 宇宙に興味があり、プラネタリウムの門をたたいた。

エ 剣けんの腕試うでしに他の道場の門をたたいた。

オ 大工が検査のために、自分の建てた家の門をたたいた。

問二 | 線② 「これはなかなか苦しいですよ」とありますが、筆者はなぜこのように考えるのですか。その説明として最も適当なものを

次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 好きなことをやるために懸命けんめいになっているのではなく、現実から目を背けているだけということに気づかされるから。

イ やりたいことのために我慢して嫌なことをすると考えていて、最終的には嫌なことにたえられなくなるから。

ウ 自分の好きなことばかりを追い求めていくうちに、我慢して嫌なことをする人のことを軽蔑するようになるから。

エ好きなことを仕事にするために努力をしているのに、自分にはその才能がなかったということに気づくときがくるから。

オ アルバイトで食べているうちに自分のやりたいことを見失い、どのように生きていけばよいかわからなくなるから。

問三 — 線③ 「重宝な」とありますが、なぜ「重宝」なのでしょう。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 師匠から認めてもらえなくても、高座で着物を着てちょっとした話をするだけで、観客を楽しませられるから。

イ 人の心をつかむ芸ができなくても、着物を着ているだけで世間の人々からは落語家として見てもらえるから。

ウ 着物を着て登場すると、客を喜ばせることができなくても、一人前の落語家の気分を味わえるから。

エ 納得のいく芸ができなくても、着物さえ着ればテレビに必要とされ、師匠にも一人前と認めてもらえるから。

オ 高座で客を楽しませなくても、派手な着物で出演しさえすればテレビ番組で必要としてももらえるから。

問四 — 線④ 「恵まれた日々」とありますが、どのような日々ですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大した芸ができなくても人々に必要とされているため、自分の好きな落語だけに専念できる日々。

イ 社会とつながるための努力をまったくしなくても、日本経済の余力により好き勝手に生きられる日々。

ウ 好きという気持ちさえあればアルバイトで生きていけるように周囲の大人がサポートしてくれる日々。

エ 日本の経済的余裕を背景に中途半端な芸でもお金を稼ぎ、自らを高めることをせずに気軽に生活していける日々。

オ 落語家になりたい意志さえあれば師匠から拒まれることはなく、だれでも落語家を目指すことができる日々。

問五 —線⑤「挑戦するしかない」とありますが、ここでの「挑戦する」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 壁にぶつかったとき、他者の目から見て努力している姿がわかるようにふるまうこと。

イ より良いものにするために様々なものを試し、自分を成長させていくこと。

ウ 他の人に努力している姿が見えないように、陰で自分なりに成長を重ねること。

エ 他人から認められほめてもらうために、人の心をつかめるよう試行錯誤すること。

オ 限界を感じながらもそれを超えることができるように、様々なことを実行すること。

問六 —線⑥「その姿は信用できるんですよ」とありますが、なぜ「信用できる」のですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の考えと、テレビや新聞から得た知識の区別をきちんとつけることができているから。

イ 意見が対立したときに、様々なものから得た知識を利用して相手を納得させることができるから。

ウ 生活の中で得た情報をもとに自分の考えを決める世間の人に同調せず、疑問を抱いているから。

エ 様々な方法で得た知識で説得されても、自分以外の考えを聞き入れる姿勢をまったく持たないから。

オ 見聞きした知識にまどわされることなく、自分の頭で考えてものごとを判断しているから。

問七 【I】の文章における筆者の考えとして、最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 周囲の言うことを信じて、好きなことだけをしていけば生きていくことができると考えている若者に対し、筆者は、お金を稼いで生きていくために、好きなことを諦めて嫌な仕事をすることも大切だと考えている。

イ 好きなことをするために手軽なアルバイトなどでお金を稼いで生きている若者に対し、筆者は、嫌なことも受け入れ社会とつながる努力をしていないために自由に生きる資格を持っていないと考えている。

ウ 嫌なことから目を背け最低限のお金を稼いで自由に生きることが良いと考える若者に対し、筆者は、好きなことをするにしても嫌なことも受け入れ、社会とつながる努力をしなければいけないと考えている。

エ アルバイトで生きることでも自分の個性であり人生の幸せにつながると信じている若者に対し、筆者は、様々な生き方がある現在においては安定を求めず夢を追いかける生き方も認めざるを得ないと考えている。

オ 小さいころから好きなことをして生きていけると周囲のマスコミや大人から聞かされている若者に対し、筆者は、現実はずっと厳しく自分の力量や程度を知ってから仕事を決めるべきだと考えている。

問八 ー線⑦「仕事にはだいたい味が待ってるんです」とありますが、どういうことですか。全体をふまえ、七十字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の一から八の各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

話の舞台となっている「星野百貨店」は戦後の復興期に風早の街に建てられ、人々から愛された百貨店であるが、時代の波に抵抗しきれず、現在、閉店がささやかれている。登場人物の佐藤健吾は父親の顔を知らず、幼い頃この百貨店の屋上遊園地で母親に捨てられ、祖父母に養育された。現在はこの百貨店の「宝飾品と時計」のフロアの責任者を任されている。この百貨店には「魔法の白い子猫」が住んでおり、その猫を見た者は、願いが一つ叶えられるといううわさがある。

冬の日曜日、母は彼を回転木馬に乗せた。いつもは一度きりなのに、何回も乗せてくれた。その日の母はいつもよりもひととき美しい装いをしていて、表情も凛として美しく、彼はうっとりとして見とれたものだった。

母はそして、姿を消した。木馬のそばのベンチに、彼を座らせて。白く甘い雪のような、ソフトクリームをその手に握らせて。

楽しい音楽と、木馬の灯りが消え、回転が止まっても、いつものように、笑顔で彼を迎えにきてはくれずに、忽然と姿を消したのだ。
(どこかで、わかっていたんだよな)

母親は自分を捨てていったのだと。待っていても、もう帰ってこないのだと。

でも、一方で、ここで待っていたいような気もしていたのだな、と、彼は気づいていた。

祖父母の家で幸せに暮らしながら、そのひとが迎えに来る日を待っていたような記憶もある。

母は迎えに来なかった。幼心に、思ったことがある。

(母さんは、あの屋上にいるのかも知れない)

あの回転木馬のそばのベンチに戻ってきて、彼を待っているのかも知れないと。

だって、ここで待っていてね、と彼にいったのだから。

あるいは風早の街がもっと近ければ、彼は祖父母の家を出て、あの屋上の遊園地に戻ったのかも知れない。

けれど、東北の幸せなその街から、風早の街は遠かった。子どもの足では戻れないほどに。

長い年月が経った。そうしてやっと、彼はこの屋上に戻ってくる事ができたのだ。子どもの頃の思いをなけば忘れてしまった、そのときになって、やっと。

①彼は苦笑した。②目元に涙が滲んだ。

「そうか。わたしは、母さんに会いたかったのか。母さんをここで待っていたかったのか」

だが、彼の母は、彼のことを愛してはいなかったのだ。彼がそのひとを愛したほどには。そうでなければ、息子を置いていくはずがない。屋上に捨てていくはずがない。それっきり、会いに来てくれないわけがない。

「わかつてはいたんだ」

だけでもしかして、彼の母がほんとうは彼に会いたくて、でも何らかの理由で来られないとしたら。いまもこの国のどこかで、彼に再び会いたいと思ってくれているとしたら。

この百貨店がなくなっていたら、困るだろうなあと思った。屋上の遊園地の、回転木馬のそばのベンチに行かなくては、と、走ってきて、もう木馬がなくなっていたら。記憶の中の母は、別れたあの頃と同じ、着物が似合う、ほっそりとした美しい女性で、その母が、屋上で、回転木馬がなくなった遊園地を見て、途方に暮れる情景を想像して、彼は新しく浮かんだ涙を拭いた。

口元は笑ってしまうのだけれど。なんて馬鹿な想像だ、と切なくなりながら。

「まったく、ひとはいくつになつたら、③おとなになれるのだろう」

街の空は、繁華街の灯りを受けて、うすぼんやりと華やかに明るい。その空を背景に、回転木馬は静かにそこにある。蛍の群れの光をまといつかせて。

彼はふと、そのそばに佇む、幼い日の自分の姿を見たような気がした。

少年は、泣いていた。母がいなくなった、と泣いていた。泣きながら、探していた。

何を？ 母と——魔法の白い子猫を、だ。

そうだなあ、と彼は呟いた。

「わたしは母に会いたいな。奇跡を願うなら、きつとそれだ」

馬鹿なことを、と自らを笑ったとき、目の前の回転木馬に明かりが灯るのを見た。

最初は蛍の光の見間違いだと思った。

けれど違った。いや見間違いようもなかったのだ。あの華やかな光が蛍のはずがない。

宝石のような色とりどりの灯りが点滅している。思い出のままに。昔の通りに。

そして彼は、一頭の木馬の背に、白い子猫が座っていることに気づいた。

金目銀目の、左右で色が違う瞳を持つ猫は、どこか得意げな表情で彼を見つめ、一声鳴いた。何かを高らかに宣言するように。

彼はただ、回転木馬に近づいていった。

「——こんな馬鹿なことがあるはずがない」

白い子猫に近づき、その輝く毛並みに、そっと手を伸ばそうとしたとき——。

ふいに足下に振動を感じた。木の床が動いている。にぎやかな音楽が鳴り始めた。

回転木馬が動き始めたのだ。

猫が木馬に乗ったまま、遠ざかってゆく。

彼は木の床の動きに呑まれるようによろめいた。とっさにそばにあった木馬の背に手をつき、弾みでその首にまたがるようなかたちで、

木馬に乗っていた。どうもおかしい。何か変だと思ったら、気がつくのと彼のからだは縮んでいた。身の丈が低くなっていたのだ。

子どもの頃の姿に戻っていたのだった。

夜空は高く、木馬は大きく、立派で。音楽は懐かしく、光の点滅は美しく。

彼は弾む心で、木馬に身をゆだねていた。

そして彼は、巡ってくる情景の中に、④あの日と同じ母の姿を見たのだった。

美しい母が、こちらに向かって手を振っている。蛍の光に包まれて。右手の薬指には、彼が贈ったガラスの指輪が光っている。嬉しい想いと懐かしさが、胸一杯にこみ上げた。

ただ違っていたのは、いつもそんなときの母は、楽しい笑顔だったのに、いまそこにいる母、夜の遊園地の暗がりには、木馬の灯りに照らし出されている母は、笑顔のまま泣いているということだった。彼に向かって手を振りながら、なぜか涙をぼろぼろと流し、それを拭いもしないで、立っていたのだった。

やがて回転木馬は止まった。木馬に飾られた華やかな灯りは消えて行き、静かな蛍の光だけが、緑色の輝きを、夜空に流していた。彼は木馬を下りた。昔のように、母の方に向かって駆けて行った。母は泣き笑いを浮かべ、身を屈めて、彼を抱き止めようと、着物の袖をひらめかせて、両手を広げた。

(中略)

佐藤健吾は、後に振り返ったとき、自らに予感のようなものがあつたのだろうと思った。

屋上で不思議な夢を見た、その数日後、店にいた彼あてに、知らない町の病院から電話がかかってきたのだ。数日前、ひとり暮らしの老婦人が病に倒れ、病院に担ぎ込まれたと。その後、意識不明のまま、眠っているのだけれど、持ち物の中に、⑤『星野ひやかてん』ほうしよくと時計のフロア『佐藤健吾』と書かれたメモが残されていた。その女性に心当たりはありますか、と問われた。

女性が病院に担ぎ込まれたときに名乗ったという名前には心当たりがなかった。けれど、その右手の薬指に古いガラスの指輪があつたと聞いたとき、会いに行かせて欲しいと願い出た。その日のうちに長い陸路の旅をして、その夜おそく、古い病院にたどりついた。

田舎の小さな病院の、古いベッドに身を横たえたその老婦人は、年老いて小さくしなびていたけれど、顔立ちに母の面影があつた。何よりも、その指にあつたという、古いおもちゃの指輪。記憶の中にあるものと重なる、子どもの頃の彼が贈ったものだったのだ。

不思議なことに、母が病院に運ばれたと教えられた日の夜の、ちょうどその時間に、彼は百貨店の屋上で、回転木馬のそばで、若き日の母の幻と対峙していたのだった。

(魂だけが、訪ねてきてくれたのだろうか)

枯れ枝のようにしなびた母の指を撫でながら、彼は思った。願いを叶える魔法の子猫かも知れないものに出会ったあととなれば、そう思わずにはいられなかった。

翌日、病院のひとに教えてもらって、母の住まいを訪れた。

母が暮らしていた部屋は、古く小さな共同住宅の一室で、荷物らしい荷物は扇風機に布団と寝間着、小さなテーブルにわずかな着替えくらいしかなく、唯一の財産といえは、古い革製の赤い小さなハンドバッグ。小銭しか残っていない財布の、その札入れの部分に、彼と百貨店の名前を記した紙切れだけが入っていたのだという。

母は彼がいまどこに居るか、どこで働いているのかも知っていたのだ。

友人もなく、誰かと話すこともなかったようだという母が倒れる前に考えていたことはわからない。総菜店で、店内の掃除や料理の下ごしらえをして暮らしていたという、そのあたりのことは、近所のひとに聞いた。店の残り物を持ち帰って、そうして日々暮らしていたらしいと。

この小さな部屋で、ひとりきりで食べる食事は美味しかったのだろうか。その様子を想像して、彼の胸は痛んだ。

食器棚のガラス越しに写真が飾ってあるのが見えた。小さい頃の彼と若い日の母が遊園地のベンチで微笑みあっていた。古い写真には指のあとが残っていた。何度もなでられたことを教えるように。

彼がどこにいるか知っていたのなら、なぜ、訪ねてきてくれなかったのだろうと考えた。

訪ねてきてくれたら、彼の家に呼んだのに。寂しい思いなんか、させやしなかったのに。

なぜ、と、思いつつ、おとなになった彼には、母の気持ちもわからなくはないのだった。

(会いたくなかったからじゃない)

それならばきつと、彼の名を記したメモを大切に残しておいたりほしくない。

(会いたくても、会えなかった)

(我が子を捨てた、そう思っていたからだ)

(自分なんかが親でいてはいけない。そう思っていたんだ)

親子だからわかる。わかるのだ、と思った。

母は弱くて駄目な人間だったかも知れないけれど、心根が綺麗なひとだった。迷いやすい、弱いひとだったけれど、同時に⑥不思議な強さももっていた。

畳に正座し、母のことを思ううちに、嗚咽が漏れた。成長後の自分の姿、おとなになって立派になった自分の姿を一目見て欲しいと思つた。もしこのまま身罷れば、母はいまの自分を知らないままで終わってしまう。

夕暮れが近づいて、ひぐらしが鳴き始めた。聴くともなく、その声を聴いていると、スマートフォンにメールが届いた。同期の広報部の部長からだった。写真が添えてあった。

古い写真をさらにスマートフォンで撮影した物のようだった。星野百貨店の屋上だ。夏なのだろう。ワイシャツ姿の笑顔の人物は、若い頃の健吾だった。屋上は賑わい、複数のお客様たちの姿が写っている。そのひとりを指すように、矢印がつけてあった。字が書きこんである。

『佐藤くん、このひと知ってる?』

着物姿の女性だった。日傘を差して、他のひとびとの陰に隠れるようににして、彼の方をじつと見ている。うしろから、見守るように。

⑦ 「お母さん」

見間違えるはずがなかった。それがどんなに古く、小さな写真でも。

(『百貨の魔法』 村山 早紀)

「注」 *1 忽然と突然であるようす。 *2 対峙向き合つて立つこと。 *3 身罷る亡くなる。

問一 ―線①「彼は苦笑した」とありますが、どういうことに対して「苦笑した」のですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母に捨てられてから長い年月が経過し、いつの間にか母の存在を忘れてしまっていた自分に気づいたこと。

イ 母が迎えに来るはずの屋上に行きたいと願っていた子供時代の記憶がうすれた今頃になって屋上にいること。

ウ 自分を大切に育ててくれた祖父母の気持ちを裏切ることだと知りつつ、母に会いたい気持ちをおさえられずにいること。

エ どれだけ願っても母には会えないとわかってはいるが、長年の習慣で母と約束した屋上に来続けていること。

オ 母に置き去りにされた傷がようやく癒えたのに、辛い思い出に満ちた百貨店に勤めることになってしまったこと。

問二 ―線②「目元に涙が滲んだ」とありますが、なぜ涙が出るのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母に会いたいという気持ちは、今も子どもの頃からまったく変わらずに自分の心の奥にあったのだということに気づき、切なさを感じたから。

イ 母に会いたいという気持ちは、大人になるにつれて乗りこえていったつもりだったが、突然に母のことを思い出し、懐かしさを感じたから。

ウ 母に会いたいという気持ちは、子どもの頃から現在まで忘れたことはないが、母には会えないことを理屈では認識しており、失望を感じたから。

エ 母に会いたいという気持ちは、ずっと心の奥底におさえ込んできたが、年齢を重ねるにつれて母との思い出が甦ってくることにやるせなさを感じたから。

オ 母に会いたいという気持ちは、子どもの頃は母を恨む気持ちと重なっていたが、大人になった今では子どもを捨てた母のつらさ

を理解し悲しみを感じたから。

問三 —線③「おとなになれる」とありますが、ここで「おとなになる」とはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 幸せな経験ばかりではなく、辛く不幸な出来事も自分の人生を形作る要素であることを納得できるようにということ。

イ 人の親としての経験を積み、子どもの気持ちを理解しつつ親の視点でものを考えられるようになるということ。

ウ 自分にとって都合の良い空想ばかりをするのをやめて、辛い現実^{つら}に立ち向かう勇氣を持てるようになるということ。

エ 自分を捨てた人間に対する憎しみ^{にく}から解放され、その記憶^{きおく}が完全に消滅^{しょうめつ}した状態で生活できるようになるということ。

オ 幼少期に対する非現実的な空想の世界を捨て去り、現実をしつかりと受け入れることができるようになるということ。

問四 —線④「あの日と同じ母の姿を見たのだった」とありますが、このとき、現実世界では「母」にどのようなことが起きていたのですか。答えとなる部分を本文中から七字で探し、抜き出しなさい。

問五 —線⑤『星野ひやかてん ほうしよくと時計のフロア 佐藤健吾』と書かれたメモ」とありますが、このメモから佐藤健吾が想

像したことの説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 息子が働く百貨店や担当フロアまで知っていても訪ねて来なかったのは、屋上での思い出が辛すぎたからに違いない。

イ 息子がどこで働いているかまで知っていても放っておかれたのは、母に自分が愛されていないからに違いない。

ウ 息子の仕事場まで来ても声をかけなかったのは、生活力のない自分が親であってはいけなそうと思っていたからに違いない。

エ 息子の居場所を知っていても会いに来なかったのは、息子を捨てたという負い目から会いに来られなかったに違いない。

オ 息子が今どこに居るかを知っていても会おうとしなかったのは、息子に憎まれていると気づいていたからに違いない。

問六 —線⑥「不思議な強さももっていた」とありますが、「強さ」を説明したものとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 我が子との別れを決意し、親の責任を放棄した以上、たとえ後でどんなに罪悪感を抱いても、決して後悔しない強さ。

イ どんなにわびしい生活に陥っても、幼い頃に一度捨ててしまった我が子を頼ろうとはせず、貧しい生活を受け入れる強さ。

ウ 我が子を捨てたということを強く意識し、今どんなに愛おしく思っているにも、決して名乗り出ず寂しさに耐え続ける強さ。

エ 幼い我が子を置き去りするという行為でも、息子の将来の幸せのためなら、あえてそれを実行することができる強さ。

オ 母親でありながら我が子の成長過程を知らないということにそれでも厳しい批判をされても、母親であろうとする強さ。

問七 本文の内容に合っているものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現実から夢の世界に移行する場面があいまいであるのは、本人が混乱していることを暗示し、美しい母の姿を懐かしく思い出したことで、この不思議な世界を意識的に作り上げようとする佐藤健吾の気持ちを汲み取ったものである。

イ 佐藤健吾の子ども時代の懐かしい思い出が出現している夢の中で、「彼に向かって手を振りながら、なぜか涙をぼろぼろと流し」という場面は、子どもを置いて去らなければならない母親の悲しい気持ちを、表現している。

ウ 物語の中心的存在である「魔法の白い子猫」の魔法で、佐藤健吾の心が幼年時代へ戻っていったという設定の中で、幼年時代の

母との思い出が描かれているのは、彼が大人になった今でも純粹な心を宿していることを表現したものである。

エ 母が「彼を抱きとめようと、着物の袖をひらめかせて、両手を広げた」で夢が終わっているのは、佐藤健吾が、この後母親に捨てられたことを表現しており、幸福な夢から一転、厳しい現実の世界に引き戻されることを暗示したものである。

オ 夢の中で佐藤健吾が見た母親の指に光っていたガラスの指輪は、幼いころ彼が母親に贈ったものであり、やがて現実の世界で母親と再会することを暗示し、同時に「魔法の白い子猫」の不思議な力を象徴したものである。

問八 線⑦『—お母さん—』／見間違えるはずがなかった。それがどんなに古く、小さな写真でも」とありますが、このときの佐藤健吾の様子を、彼の心情の変化に注意しながら、九十字以内で説明しなさい。

三 次のA～Cの—線のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

(二画一画でいいにはつきりと書くこと。送り仮名が必要な場合、それも解答らんに書きなさい。)

A お客様のご意見をウケタマワル。

B 一年で一番昼の時間が長くなる日をゲシという。

C 全員がイチガンとなって戦う。

座席番号				
—				
受験番号				
1	3			

氏名

問一	ア
問二	イ
問三	イ
問四	エ
問五	オ
問六	オ
問七	ウ

問八

ど	の	よ	う	な	仕	事	で	も		社	会	と	つ	な
が	る	努	力	を	し		自	分	の	頭	で	考	え	
執	着	を	見	つ	け	る	こ	と	で		人	は	仕	事
を	面	白	く	感	じ	る	こ	と	が	で	き	は	事	
に	な	る	と	い	う	こ	と			で	る	よ	う	

問一	イ
問二	ア
問三	オ

問四

病院に運ばれた

問五	エ
問六	ウ
問七	イ

問八

自	を	自	分	を	見	守	る	母	の	姿	を	見	て		自	分
自	捨	分	を	て	た	と	思	母	の	い	た	母	が		実	は
気	に	抱	づ	き		子	ど	も	の	こ	ろ	か	ら	心	の	奥
に	あ	い	て		大	切	に	思	こ	て	く	れ	て	い	た	は
気	に	あ	ふ	れ	だ	し	て	い	る	す	る	愛	情	が	一	

三
A
承
る
B
夏
至
C
一
丸

2×3 ※

6

12×1 ※

12

5×7 ※

35

12×1 ※

12

5×7 ※

35

得点 ※

100